

大阪城の庭 大阪の庭

藤井 里江

【目的】

大阪での観光と言えば、USJなどに代表されるアミューズメント施設での体験や、ミナミ・キタなどでショッピングやグルメを満喫する。といったアクティブな観光が代表的である。これらはもちろん大阪を感じて、楽しんで頂ける点でお勧めである。しかし、ちょっと変わったところで、大阪で庭園を愛でる。というのはどうだろう。近代の大阪は明治維新の影響や、第二次世界大戦による被害により、古来からの庭は消滅してしまっただけのものが多いが、それでもなお残る庭や、戦後新たに造られ、施主や管理者に愛されて存続している庭などが存在する。そういった庭に注目し、発掘することで、大阪の違った一面を紹介し、大阪の魅力の増大につなげることを目的とする。

【内容】

大阪の代表的な史跡観光スポットである大阪城にある「本丸日本庭園」「豊国神社境内秀石庭」「西の丸庭園内松豊庵茶庭」の3つを紹介する。特に「本丸日本庭園」についてはどのように日本庭園が造られるに至ったかの経緯を述べ、観光資源として活用する重要性を説明する。「秀石庭」については、現代の代表的な作庭家で全国的にも有名な重森三玲氏の作品が大阪城内に存在し、かつ大阪の歴史と深く関係のあるテーマで造られていることを説明する。

そして大阪の庭の紹介では、今回は重森三玲氏に注目し、「秀石庭」以外に、「岸和田城八陣の庭」「以楽苑」などの巡れる庭、また施主に愛されて現存する「井上邸巨石壺」、再認識により消滅の危機を免れた「少林寺庭園」を取り上げ、重森三玲氏作品の愛好家はもとより、初めて重森三玲氏を知る方へは氏の作品が大阪にあることを知って頂き、そこから庭への興味を持って頂けることを期待する。

【結果】

現在大阪において庭だけを見に行くことを目的とした集客については周辺環境との調和などを考えるとまだ多数を引きつける魅力に乏しいかも知れない。まずは大阪の人々よりその存在を認識し、維持されることに尽力し、その上で大阪の魅力として他に発信することで、観光資源として成長していく余地は十分にあると感じている。今回は調査した内の一部の報告に留まったが、機会があれば更に調査し発信していきたいと思っている。

1. はじめに

大阪観光と言えば、アミューズメント施設、歴史的建造物や史跡、グルメの街、ショッピング街等で楽しめる方が大勢いる。そんな中で「大阪に庭を見にいきませんか」というと、どうだろう。「庭巡り」と言う関西では京都をイメージする方の方が多いだろう。しかし、大阪にも素敵な庭があることを紹介し、これまでとは違った大阪の観光資源となることを期待しつつ、今回は大阪城の庭、大阪の庭を取り上げてみることにした。

2. 大阪城内の庭

多くの観光客で賑わう大阪城だが、その中であまり多くの人々がそれを目的として訪れないスポットとして庭がある。大阪城には、本丸内「日本庭園」、豊国神社境内「秀石庭」、西の丸庭園内「豊松庵」の茶庭などがあるが、本丸「日本庭園」は大阪市土木部初代公園課長で、宮内省勤務時代は赤坂離宮の庭園などを手掛けた椎原兵市氏による作品である。また、「秀石庭」は昭和の作庭家重森三玲氏の作庭によるものである。そして大阪城西の丸庭園内の「豊松庵」は松下幸之助氏の寄贈による茶室で、これに付随する茶庭が設えられている。

以降に城内の各庭園について由来を説明する。

1) 大阪城の庭「本丸日本庭園」～武士の城から市民の公園へ～

豊臣秀吉の築城から、徳川幕府の城として武士が管理した大阪城は維新により官、そして陸軍が管轄することとなる。大正時代に大大阪へと発展した大阪市は、近代都市として発展する中、人口の過密、公害など種々の問題対策や緑地化の一端として市内における公園整備が進められた。

大阪城も市民の集う中央公園として計画、整備され、時代のニーズに合わせてその容態が変化し、現在は大阪の重要な観光スポットとして集客を担っているが、まず大阪城が公園として整備された流れを追いながら、「本丸日本庭園」の位置づけを確認する。

1920年（大正9年）武田五一氏の推挙により大阪市都市計画部に任ぜられた椎原兵市氏は就任当時「近き将来において大阪の中央公園たらしむべき理想の下に設計したもので、雄大な歴史的記念物たる城跡を利用して大都市に相応しい壮重な美観と儀容とを備えたい」（『現代庭園図説』）という趣旨から『大阪城跡公園設計案』を立案した。大阪城本丸、二の丸のほか、現追手門学院の敷地と、現大阪府庁舎、現大阪府警本部、現大阪歴史博物館をも含む広い範囲において、当時城内にあった多数の陸軍施設を一切取り除いた計画で、記念館、博物館、美術館、簡易図書館、社交館、武徳館、植物園、音楽堂、運動場などの施設が城内にびっしりと盛り込まれていた。

1924年（大正13年）に大阪市土木部公園課の初代課長となった椎原兵市氏は昭和の御大典記念事業として大阪城天守閣復興と同時に進められた大阪城公園の新設に多岐に尽力する。この中で当時本丸内にあった元紀州御殿に附属する日本庭園は、「京都二条離宮の名園にヒントを得て、御殿建築に相応しく築いた庭園」（『椎原兵市の作品と業績』）としている。

陸軍により1885年（明治18年）に和歌山城から移築された建造物は大阪城本丸で紀州御殿として利用され、1931年（昭和6年）には天皇の御在所である「天臨閣」と呼ばれた元紀州御殿附属の庭園が「在来の平庭を築山林泉風に改造したもの、中央に鶴翼型の泉池を湛え、背面に築山を廻し、瀑布をかけ、溪流を造り、このみは純日本式」（『大阪城』大阪市役所 昭和6年）で作庭された。

戦後1948年（昭和23年）に立案された「大阪城公園設計案」では、「滅損しつつある城跡を旧態に復興して、史跡を顕彰し、城跡公園として相応しい内容とすること、また城郭建築美をいやが上にも発揮せしめるということを主眼とし、本丸地区は地方観光客を目的に計画〜」（『椎原兵市の作品と業績』）されたものであった。

多数の来城者に対して鑑賞し得る景観を整えているこの純日本式庭園は、現在の国内観光客はもとより、海外からの観光客をも誘引する観光資源に成り得ると考える。

2) 大阪城の庭「秀石庭」～重森三玲の庭～

秀石庭は、1972年（昭和47年）京都林泉協会の40周年記念事業として豊国神社境内に

作庭寄贈された。作庭者は京都林泉協会の創設者重森三玲氏である。

この「秀石庭」は、『日本庭園史大系 現代の庭（四）』（重森三玲・重森完途著）によれば、かつて大阪城の地が石山の地であったとされることから、豪快な石組本意の作庭による蓬莱式の庭をテーマとし、豊国神社のご祭神が豊臣秀吉であることから、豊公説話に有名な千成瓢箪を地模様としてモダンな現代新感覚に生かすことをテーマとしている。また、商都大阪の発展を支えた大阪港という海洋の表現を設計に入れ、神社本来の上古的な磐座や磐境にみる清浄無垢純真潔白な枯山水としての表現構成が意図され、かつ豊公の豪快な性格を基本とすることをテーマとしている。

つまり、大阪の地形や歴史やゆかりの人物などを考慮したテーマにおいて庭が設計されているのである。

三玲氏が当時「明治中期以来の煙の都と化した大阪市には、庭木すら育ち難い場所となり趣味性の上からはゼロの町となった」と述べているように、工業都市発展の犠牲と、第二次世界大戦の被害により古来からの庭が消滅していく中で、特別史跡大阪城に寄り沿う新たな芸術空間である庭が創設されたことは大変貴重である。

（豊国神社庭園への入園は予め申込みが必要。但し、塀の外側より全体を鑑賞すること可）

3) 大阪城西の庭園「豊松庵茶庭」

西の丸庭園は、1965年（昭和40年）有料庭園として開園された。1969年（昭和44年）松下幸之助氏の寄贈により茶室「豊松庵」が設置され、茶庭より天守閣を臨むことができる。なお、松下幸之助氏はこれ以外にも多くの茶室を寄贈されており、大阪市内には他に四天王寺本坊東の「極楽浄土の庭」の中にも茶室を寄贈されている。「極楽浄土の庭」は仏教の「二河白道」をテーマとした作庭で、その意味を感じながら庭の景観を鑑賞することが楽しめる。

（豊松庵茶室の使用は許可申請が必要。有料）

3. 大阪の庭～重森三玲氏作庭の作品～

大阪の庭の紹介では、今回は作庭家「重森三玲氏」の作品に注目し、紹介する。京都における三玲氏の庭はかなり周知されているが、手がけた作品数は、京都に次いで大阪が二番目に多い。大阪での作品は個人邸が多く、今回紹介する庭も非公開もしくは条件付き公開のところもあるが、「秀石庭」以外の、大阪に存在する三玲氏作庭の一部を以下に紹介する。

1) 岸和田城「八陣の庭」

岸和田城天守閣の正面の庭。1953年（昭和28年）完成。永遠に保存できる設計を第一とし、永遠の人々の鑑賞を必要とすることから、上空から俯瞰的鑑賞を意図した設計とし、城郭庭園というテーマより、室町期以前の城砦の地取を参考としている。

また、諸葛孔明の「八陣法」から「天地風雲竜虎鳥蛇」を石組みにより抽象的にデザインし、枯山水として作庭。石は和歌山市沖ノ島の緑泥片岩を使用。なお、八陣法は敵を攻める陣形ではなく、平和確立のために外敵から守る陣形であり、平和を念願とする本来の意味を構成している。（『日本庭園史大系 現代の庭（三）』重森三玲・重森完途著 参考）

（岸和田城入場料要）

2) 以楽苑

大阪府枚方市香里。1962年（昭和37年）完成。1955年（昭和30年）7月日本住宅公団の発足とともに、枚方市香里の旧陸軍弾薬庫跡の国有地45万坪が住宅団地に決定し、香里団地として建設された。この地の北部に保存されていた自然の池を利用し、かつデフォルメして四季自然を主体とする日本庭園としての構成を完成。「池庭北部の築山付近」は、北方の一番大きい築山部の石組みで、現代化された蓬莱的要素を持っている。（『重森三玲作品集』重森三玲著 より抜粋）（年二回一般開放。無料。常時は苑外より鑑賞可。）

3) 井上家庭園「巨石壺(コセキコ)」(非公開)

大阪市生野区。1940年（昭和15年）完成。大阪市指定名勝。京都における重森三玲氏の代表作、東福寺本坊及び塔頭寺院の庭が作庭された後、徳島城庭園及び阿波国分寺の庭

を調査された三玲氏はその影響を受け、その後の作風が大きく変化する。徳島の庭園調査の翌年に作庭された井上邸「巨石壺」は三玲氏の特徴となる青石の立石組構成で表現され、三玲氏作風の新エポックの先駆けとして造られた。三玲氏作品の変革期の代表作がこの大阪市に存在することは大阪市にとっても貴重である。

4) 少林寺庭園（非公開）

大阪市中央区。臨済宗妙心寺派 萬松山少林寺。寛永八年（一六三一年）創設。境内の庭は1954年（昭和29年）作庭。青石を使った七五三石組の枯山水形式である。本庭園は一時期作庭の由来が引き継がれていない状況であったが、重森三玲氏の作庭であることが再認識され、保存の意識が高まっている。

『近代の庭園・公園等に関する調査研究報告書』（平成24年6月 文化庁文化財部記念物課）では、「保護の必要性が十分に検討されないまま、都市化及び再開発によって消滅又は改変の危機に瀕している近代の庭園・公園等も数多く存在する」とあり、それらの保存及び活用のための措置を講じる上での調査研究の中で、和風庭園の著名な作庭家の一人として重森三玲氏が挙げられている。

庭の維持管理は所有者または管理者に委ねられることになるが、大阪における庭においても、現存する庭の評価と、消滅の危機に瀕している庭の再認識が望まれる。

4. 提言

1) 大阪城の庭における提言～秀石庭の借景～

大阪城二の丸豊国神社境内「秀石庭」は作庭された当時、周りの樹木は今ほど成長しておらず、庭の北西の方向に「一番櫓」を臨むことができた。城内の緑化、野鳥の休息場として樹木を減らすことはそれぞれの側面において適切ではないかも知れないが、「秀石庭」石舞台より「一番櫓」を借景として臨むことができるようにした場合、大阪城の庭として特徴のある庭となり得ると考える。

2) 大阪城の庭における提言～本丸日本庭園の燈籠型照明と滝～

1931年（昭和6年）に元紀州御殿の附属庭園として整備された際には、師団司令部の残土をもって築山が築かれ、庭園を回遊できるように造られたが、当時の龍山石製燈籠型照明は機能を失くし、瀑布のかかる滝は溪流を常に流しているとは限らない。この燈籠型照明と滝を復活させ、回遊路を整備することで、日本庭園を更に楽しめることと考える。

5. おわりに

大阪ではあまり観光資源として注目されることの少ない「庭」であるが、大阪城や岸和田城のように既に観光スポットとして集客が確保されている場所での再認識や、近年「現代の作庭家」として評価されている重森三玲氏の庭紹介などにより、大阪の多面的魅力をもって観光資源となることを期待している。

<参考文献>

- | | |
|-----------------------|-------------------------------|
| 『椎原兵市の作品と業績』1966年 | 『建築と社会第15巻第7号』日本建築協会 1932年 |
| 『現代庭園図説』椎原兵市 1924年 | 『日本庭園史大系 現代の庭』重森三玲・重森完途 |
| 『重森三玲作品集』重森三玲 1964年 | 『重森三玲—永遠のモダンを求めて—』重森千青 2007年 |
| 『大阪城』大阪市役所 1931年 | 『日本庭園鑑賞便覧』京都林泉協会 2002年 |
| 『重森三玲II』重森三明 2010年 | 『名勝に関する総合調査』文化庁文化財部記念物課 2013年 |
| 『図解雑学 日本庭園』重森千青 2010年 | |